

O1-015

出生体重1000g未満の児の生命予後と神経学的予後に関する当院のまとめ

大橋 敦¹、長濱 輝代^{1,2}、辻 章志¹、金子 一成¹¹関西医科大学 小児科講座、²大阪市立大学大学院 生活科学研究科

【はじめに】

医療機器や治療法の開発、管理方法の向上などの新生児医療の進歩に伴い早産児の予後は改善している。しかし、出生体重1,000g未満の児(超低出生体重児)は極端な未熟性ゆえに、生命予後や神経学的予後が不良である。

【目的】

関西医科大学附属病院における超低出生体重児の生命予後と神経学的予後を明らかにする。

【対象と方法】

2006～2013年に新生児集中治療室(Neonatal Intensive Care Unit: NICU)に入院した超低出生体重児の生命予後と、神経学的予後について後方視的に検討した。発達検査は3歳時に新版K式発達検査(以後、K式検査)を用いて行った。K式検査は担当医の判断で4歳時、5歳時にも施行した。統計解析は、2群間の比較はMann-Whitney U検定、3群間の比較はSteel-Dwass法を用いた。

【結果】

当該期間にNICUに入院した児は2294名で、そのうち超低出生体重児は120名[5.2%]で、死亡率は18.3% [22/120名]であった。そのうち3歳時にK式検査が施行できたのは51例で、在胎週数、出生体重の中央値はそれぞれ26.4週(25.2-28.0週)、781g(621-870g)であった。3歳、4歳、5歳時に施行したK式検査による発達指数(DQ)は、それぞれ78(70-80)、79(73-87)、84(77-90)であった。3歳時にDQが70未満の発達遅延を呈する児は、13/51名[25%]であった。(かっこ内は四分位範囲)

【考察とまとめ】

2003-2007年の本邦の主要施設における超低出生体重児に関する調査では、死亡率は18.0%、3歳時のDQが70未満を呈する児の割合は20.8%であった。当施設の死亡率は全国平均とほぼ同等であったが、発達遅延を呈する児の割合は高率であった。しかし、5歳時のDQの中央値は84まで上昇しており、多くの児が就学前にはほぼ正常域まで神経学的予後が改善していた。

O1-016

超・極低出生体重で出生した児童の知的発達の経過についての検討

伊藤 淳一

北海道社会福祉事業団太陽の園 発達診療相談室小児科

【目的】

小学校の就学時には年齢相当の知的発達と判断された、超(1000g未満)・極(1000g以上1500g未満)低出生体重児で出生した既往のある(以下、超・極出生児)14例の知的発達の経過について前方視的な検討を行った。なお、本報告については保護者より評価結果の公表について了承を得ており、当施設の個人情報に関する指針に準拠した。

【対象と方法】

対象事例は超・極出生児ともに7例であり、両群に軽度の痙直型両麻痺を有する児童が各1名いた。入学前の田中ビネー検査での知能指数が85以上を対象とした(超出生児:平均97、極出生児:平均99)。小学入学前に施行したKABCによる認知能力(経次、同時処理能力)の各標準得点と、低学年(小学1・2年)と高学年(小学5・6年)時におけるWISC・4による知的発達の評価を行い、言語理解、知覚推理、ワーキングメモリー、処理速度の4項目の合成得点、さらに言語理解と知覚推理の合成得点の乖離について比較した。

【結果】

入学前時点の評価で、経次処理(超:90、極:107)・同時処理(超:80、極89)ともに、超出生児は極出生児よりも低かった。低学年時の評価では、言語理解(超:87、極:96)、知覚推理(超:77、極:90)、ワーキングメモリー(超:82、極:90)の3項目について超出生児は極出生児よりも低かった。高学年時の評価においても、言語理解(超:87、極:108)、知覚推理(超:77、極:89)、ワーキングメモリー(超:82、極:104)の3項目は超出生児で低かった。なお、言語理解が85未満の児童は超出生児3名、極出生児はいなかった。超出生児5名、極出生児は3名の知覚推理は85未満であった。言語理解と知覚推理の得点差については、低学年時は超出生児3名・極出生児1名で有意な差(いずれも言語理解が優位)であった。高学年時については、超出生児は3名(いずれも言語理解が優位)、極出生児では7名全例(うち6名は言語理解が優位)において有意な差を認めた。

【考察】

超出生児においては、入学前の時点で明らかな知的発達の遅れが指摘されていないとしても、認知能力の特異性の内在について留意する必要がある。極出生児についても同時処理能力の困難性を有する場合、高学年になるにつれて知的発達の特異性が顕著化する可能性がある。さらに、言語理解と知覚推理の発達の乖離が学習習得の困難性や情緒的な不安定さにつながることも懸念される。